

詩人の傳記と批評はどのように形づくられるか——『列朝詩集小傳』を例に——

『列朝詩集』と『列朝詩集小傳』について

我々は、ここ数年、『列朝詩集小傳』（以下、『小傳』）と錢謙益（一五八二—一六六四）の文學思想について研究を進めてきた。このパネルディスカッションでは、『小傳』を例に中國の詩人の傳記や評價がいかにか形づくられていったかについて検討する。

個々の報告の前に、『列朝詩集』および『小傳』についての概略を述べておく。

『列朝詩集』八十一卷は、錢謙益が明朝滅亡後に、明一代の詩を後世に遺すことを目的として編纂した明詩の選集である。<sup>(1)</sup> 上は皇帝から下は僧侶や宦官まで、一八三二名の詩人の詩篇を収録し、詩篇の冒頭

には詩人の「小傳」が置かれている。

こうした體例は元好問の『中州集』に倣ったものである。『列朝詩集』はまた、巻頭の「乾集」（皇帝や諸王の詩）、巻末の「閏集」（高僧・道士・女性の詩など）を除く各集を、甲、乙などの十干で表示するが、これも『中州集』を手本にしている。ただし、『列朝詩集』には「丁集」までしかなく、「戊集」以下は存在しない。錢謙益の自序<sup>(2)</sup>は、萬物が繁茂する「戊」以下を編纂しなかった理由について、明復興の盛徳大業に期するところがあるためだと婉曲的に述べている。

一方、「甲集」の前に特別に「甲集前編」を設け、元末明初の遺老の詩篇を収録している。元末明初にかけて文名のあつた人物としては楊維禎・高啓・宋濂・劉基らがいるが、楊維禎は「甲集前編」に、高啓と宋濂は「甲集」に、劉基は「甲集前編」と「甲集」の両方に著録

野村 鮎子  
田口 一郎  
和泉ひとみ  
松村 昂

される。劉基と宋濂はともに文官として太祖の創業を支えた開國の功臣であり、年齢も一歳しか違わないにも関わらず扱いが異なる。劉基に元朝に出仕していた経歴があるのが理由だが、この著録の仕方には劉の出處進退に對する錢謙益の複雑な思いが込められており、これについては第一部で詳しく述べる。

『列朝詩集』編纂の歴史は長い。錢謙益は萬曆三十八年（一六一〇）に進士に及第し、翰林院編修となったが、父の服喪のため歸郷し、そのまま神宗在位中は常熟で里居を續けた。この里居の時期に程嘉燧とともに三十家を選んだのが最初の『國朝詩集』である。しかし、編纂作業は天啓元年（一六二二）の中央政界への復歸によつて一旦中斷する。それを再開したのは、二十數年後、明清鼎革後の順治三年（一六四六）のことで、順治六年には一應の完成をみている。これが『列朝詩集』であり、毛氏汲古閣によつて刻され、清順治十一年（一六五四）ごろに完刻した。<sup>(3)</sup>さらに、康熙三十七年（一六九八）には、錢謙益の族孫である錢陸燦が「小傳」のみを輯めて『列朝詩集小傳』十卷を刻行し、これが今に至るまで明代詩人研究の基礎資料として廣く流布している。

しかし、「文獻徴すべきもの無き」時代とは異なり、明代の文獻は目撃可能なものが多く、錢謙益が依據した資料を索出し、原資料と『小傳』とを比較對照することも可能である。つまり、『小傳』がどのよう<sup>(4)</sup>に詩人の傳記と評價を形づくつていったか、その過程をある程度跡づけることができるのである。錢謙益は詩人の傳記をどのように再編

集したのか。以下、四つのテーマでパネリストが具體的に紹介する。

なお、パネリストによる報告の後、四名の會員から質問があった。時間の制約からその場では十分に答えられなかったことも含めて、注の形で説明を補足しておく。注（一）（二）（三）がそれに該当する。

### 第一部『小傳』の依據資料からみた『列朝詩集』の性格

（野村鮎子）

まず依據資料からみた『小傳』の性格について、劉基・高啓・徐禎卿・葛一龍の傳を例に考える。

#### 一、自己投影としての『小傳』——劉基傳

劉基（一三一〇—一三七五）は、もとは元朝の官僚で、のちに朱元璋に仕えた明開國の功臣である。『列朝詩集』は劉基の元朝時期の詩篇を「甲集前編」に収録し、入明後の詩篇については「甲集」卷一に収録している。そのため、劉基の「小傳」も二種類存在する。

#### 甲集前卷 劉基傳

基字伯溫、青田人。元至順癸酉明經登進士第、累仕皆投劾去。方谷眞反、爲行省都事、建議招捕、省臺納方氏賄、罷官、羈管紹興。感憤欲自殺、門人密里沙抱持得不死。太祖定婺州、規取處、石抹

宜孫總制處州、爲其院經歷。宜孫敗走、歸青田山中、伏匿不肯出。孫炎奉上命鈎致之、乃詣金陵。後以佐命功、官至御史中丞、封誠意伯。正德中、諡文成。公自編其詩文曰『覆瓿集』者、元季作也。曰『犁眉公集』者、國初作也。…(中略)…余故錄『覆瓿集』列諸前編、而以『犁眉集』冠本朝之首、百世而下、必有論世而知公之心者。(基字は伯溫、青田の人。元の至順癸酉「四年」明經もて進士の第に登り、累ねて仕うるも皆な効を投じて去る。方谷眞「方國珍」反し、行省都事「行中書省都事、從七品」と爲りて、招捕「自ら投降させて捕縛すること」を建議するも、省臺方氏の賄を納れ、官を罷めしめ、紹興に羈管す「中央政府の要路が方氏の賄賂を受け取り、劉基を罷免して紹興での禁足處分にした」。感憤して自殺せんと欲するも、門人密里沙抱持して死せざるを得たり。太祖婺州を定め、處を規取するに「處州の奪取を謀り」、石抹宜孫處州に總制たりて、其の院經歷「行樞密院經歷」と爲る。宜孫敗走し、青田の山中に歸り、伏匿して肯えて出でず。孫炎上「明太祖」の命を奉じて之を鈎致し、乃ち金陵に詣らしむ。後命を佐するの功を以て、官は御史中丞に至り、誠意伯に封ぜらる。正徳中、文成と諡せらる。公自ら其の詩文を編みて『覆瓿集』と曰う者は、元季の作なり。『犁眉公集』と曰う者は、國初の作なり。…(中略)…余故に『覆瓿集』を録して諸れを前編に列ね、而して『犁眉集』を以て本朝の首に冠す。百世して下、必ず世を論じて公の心を知る者有らん。)

甲集卷一 劉基傳

余考公事略、合觀『覆瓿』『犁眉』二集、竊窺其所爲歌詩、悲惋衰颯、先後異致。其深衷托寄、有非國史家狀所能表其微者、每盡然傷之。(余公の事略を考え、『覆瓿』『犁眉』の二集を合わせ觀るに、竊かに窺う、其の爲る所の歌詩は、悲惋と衰颯と、先後致を異にするを「一方は悲憤嘆惜の詩、もう一方は衰落頹廢の詩が多く、前後で趣を異にしている。」。其の深衷托寄、國史家狀の能く其の微を表す所に非ざる者有りて「『實録』や行狀などで微妙なところが表現しにくいものがあり、」、毎に盡然きよくとして之を傷む「いつも悲痛な思いでいる」。)

劉基の『覆瓿集』と『犁眉公集』をそれぞれ元朝での作、明朝での作として二分する方法は、錢謙益が明朝での作を『初學集』、入清以後の作を『有學集』と名づけたことにも通じるものである。明と清の兩朝に出仕した錢が劉基に自己を投影させていたことは明らかで、錢は元朝時期の詩集である『覆瓿集』の中に劉の「悲惋「悲憤嘆惜」を、明代の『犁眉公集』に「衰颯「衰落頹廢」」を指摘するが、この批評は自らの心情を重ね合わせたものであろう。<sup>④</sup>

「劉基傳」の依據資料は「誠意伯劉公行狀」(以下、「行狀」)である。「行狀」の敘述は明朝での活躍に重きが置かれるが、「小傳」はむしろ元の忠臣としての劉基を描くことに熱心である。たとえば、「行狀」では劉基は舊主である元の石抹宜孫が朱元璋に敗れる以前に、青田に歸隱していたことになっているが、「小傳」では青田退居は石抹

宜孫の敗北後だとし、劉が舊主への節義を守ったことを強調する。また、「行狀」では劉は天象を見て天命を知り、「眞主」を輔けるべきだという母の言葉で朱元璋への出仕を決断したとされるが、「小傳」では孫炎の勧誘と説得で出仕を餘儀なくされたことになっている。<sup>五</sup>

このように「小傳」は、「行狀」をそのまま引用することには抑制的であるが、一方では「行狀」の話を斷章取義的に利用している箇所もある。すなわち方國珍から賄賂を受け取った元の中央政府の要人が、方を赦免し、それに反対する劉基を罷免したため、劉が憤りのあまり自殺を圖つたという逸話である。<sup>六</sup>この逸話は、「小傳」の中で劉の政治腐敗への義憤を強調する効果をもたらしており、そこには錢謙益の作爲が認められる。

## 二、刑死をめぐる異説の提示——高啓傳

高啓（一三三六—一三七四）は、呉の張氏政權下で詩名を馳せた詩人で、入明後は太祖に仕えたが、のち腰斬の刑に處せられた。

「高啓小傳」（甲集卷四）は、彼の刑死を次のように説明する。

先是季迪以史事爲祭酒魏觀屬官、雅相知契。觀奉命守蘇、爲季迪徙居城中夏侯里、接見甚密。觀改修府治、季迪作「上梁文」、連坐腰斬、洪武七年也、年三十有九。（是れより先季迪は史事を以て祭酒「國子監祭酒」の魏觀の屬官と爲り、雅より相もと知り契たり「知己の間柄だつた」。觀命を奉じて蘇に守たるに、爲に季迪をして

城中の夏侯里に居を徙せしめ、接見甚だ密なり。觀府治を改修するに、季迪「上梁文」「棟上げの文」を作り、連坐して腰斬せらる、洪武七年（一三七四）なり、年三十有九。）

刑死の表向きの理由は、蘇州知府の魏觀が張士誠の宮殿の遺址に府衙を築いたことで謀叛の罪を得、魏觀と親しかった高啓がかつて府衙のために「郡治上梁文」を書き、その中に「龍盤虎踞」等の句があつたとして明太祖の怒りをかつたというもので、「小傳」も基本的にこの説に沿つた内容になっている。

しかし、錢謙益は甲集第四之下に採録する高啓詩「宮女圖」に附記する形で異説を提示している。

吳中野史載季迪因此詩得禍。余初以爲無稽。及觀國初『昭示』諸錄所載李韓公子侄諸小侯爰書及高帝手詔豫章侯罪狀、初無隱避之詞、則知季迪此詩蓋有爲而作。諷諭之詩、雖妙絕古今、而因此觸高帝之怒、假手于魏守之獄、亦事理之所有也。論者詳之。

（吳中野史載す、季迪此の詩に因りて禍を得たりと。余初め以て無稽と爲すも、國初の『昭示』『洪武二十三年に太祖が發布した『昭示姦黨錄』の諸錄の載する所の李韓公「李善長」の子侄の諸小侯の爰書「判決文」及び高帝手詔の豫章侯「胡美」罪狀の、初めより隱避の詞無きを觀るに及び、則ち季迪の此の詩は蓋し爲なにする有りて作るを知れり。諷諭の詩、古今に妙絶たりと雖も、此れに因りて高帝の怒りに觸れ、手を魏守の獄に假するは、亦た事理の有る所なり。論者之を詳らかにせんことを。）

右によれば、「宮女圖」は太祖の荒淫と後宮の亂脈ぶりを諷諭したもので、太祖はこれを恨み、後に魏觀案にかこつけて彼を斷罪したことになる。もちろんこれを牽強附會の説とする見方もあるが、真相がどうであれ、錢謙益が提示した異説が詩人の悲劇的な最期をいつそう謎めいたものにしたことは確かである。

### 三、反七子・反竟陵——徐禎卿傳と葛一龍傳

錢謙益は自らの吳の詩を正統な雅聲だとする一方、七子の詩を秦風（秦調）、竟陵派の詩を楚風（楚調）と呼んで排撃した。

「徐禎卿傳」（丙集卷九）は、徐禎卿（一四七九—一五一二）が吳人であったにもかかわらず、進士及第後に北京で李夢陽の復古主義に傾倒したことを批判し、「吳中の名士頗る『邯鄲學歩』の諷り有り」という。ただし、前七子隆盛の時代に徐禎卿を誇った「吳中の名士」がいたかどうかは疑わしい。ここでいう「吳中の名士」とは、明末の、反七子の文學觀を錢謙益と共有する者であつたに違いない。

また、明末清初、吳の洞庭山の生まれで五律の名手とされた葛一龍（一五六七—一六四〇）は、竟陵派の譚友夏と親しく交わり、その詩風の影響を受けたことで錢に徹底的に糾弾されている。竟陵派は錢謙益にとつて亡國の調べであつた。<sup>(1)</sup>

「葛一龍傳」（丁集卷十四）は「人謂う震甫「葛一龍の字」の楚にかまひすしきは、猶お昌穀「徐禎卿」の秦に移るがごとく、爲にいっさ一啗す可きな

り」として、その吳聲に對する裏切り行爲を徐禎卿に擬えるのである。

『列朝詩集』は彼の詩を六十八首と多數収録するものの、それは錢謙益が「吳の後賢をして自ら樹つる所以を知らしむ」ために「晩年の變調「楚調」を祓除し」たものだという。

以上のように、錢謙益は吳の出身者で七子や竟陵を標榜する者に對して、容赦ない批判を浴びせている。そしてそれはもはや客觀的な批評としての域を超える次元のものである。<sup>(2)</sup>

### 第二部「謝榛小傳」からみる『列朝詩集』の性格

（田口一郎）

「後七子」の一人とされる謝榛（一四九九—一五七五）を例に、錢謙益『列朝詩集』の詩人评价の問題點を考察する。

#### 一、『列朝詩集』の詩人评价の偏向

『列朝詩集』の詩人评价に偏向があることは、夙に例えば吳偉業「龔芝麓詩序」（『吳梅村集』卷二三）、「太倉十子詩序」（『吳梅村集』卷三十）などによつて指摘されているが、具體的にはどのようなものであつたのか、以下に見ていこう。

#### 二、『列朝詩集小傳』の記載と事實との齟齬

『列朝詩集』丁集卷五・謝山人榛傳から、三つの部分を取りあげ検討する。

1、諸人作五子詩、咸首茂秦……交口排茂秦、削其名於七子・五子之列。(諸人 五子詩を作すに、咸な茂秦を首とし、……口を交えて「口々に」茂秦を排し、其の名を七子・五子の列より削る。)

一般に○子詩というと、自分以外の○人となり、その人数に本人は含まれない。つまり「五子詩」というと実際には六人から構成されるのが普通である。そこで文學史上いわゆる「五子」の「五子詩」(いづれも五言古詩)の構成員(いづれも採録順)を確認してみる。

- ・宗臣『宗子相集』卷四「五子詩」、  
謝榛・李攀龍・徐中行・梁有譽・王世貞。
- ・梁有譽『蘭汀存藁』卷一「五子詩」、  
謝榛・李攀龍・徐中行・宗臣・王世貞。
- ・李攀龍『滄溟集』卷四「五子詩」、  
王世貞・吳國倫・宗臣・徐中行・梁有譽。
- ・王世貞『弇州四部稿』卷十四「五子篇」、  
李攀龍・徐中行・梁有譽・吳國倫・宗臣。
- ・吳國倫『甌甌洞稿』卷五「五子詩」、  
李攀龍・王世貞・宗臣・徐中行・梁有譽。
- ・謝榛『四溟集』、徐中行『天目先生集』『青蘿館詩』には「五子詩」は無し。

以上からわかるのは、「五子」というのは固定した五人ではなく、時々の會合に参加した自分以外の「五人の君子」(計六人)という

意味であること、また「みな」が謝榛を五子の筆頭に置いておられるわけでもなく、謝榛が含まれない場合すらあることである。つまり「小傳」の記述から、當時固定した「五子」がいたと考えると誤りになる。

さらにこういう場合、順番も實力者が筆頭に來るのではなく、年齢が高い順に記されるのが普通である。所謂「七子」の出生年を見てもみると、以下の通り。

- 謝榛(二四九生)、李先芳(一五一一生)、吳維嶽(一五一四生)、李攀龍(一五一四生)、余曰徳(一五一四生)、徐中行(一五一七生)、梁有譽(一五一九生)、吳國倫(一五二四生)、宗臣(一五二五生)、王世貞(一五二六生)、張佳胤(一五二七生)

これを基に上記「五子」を見ると、李攀龍・吳國倫詩の配列が若干乱れるのを除き、他はほぼ年齢順に配置されていることがわかるだろう。

つまり錢謙益は何種かある「五子」の一部、年齢が上の謝榛が先に書かれている部分を取り上げ、あたかも謝榛が「五子」の指導者であったかのように述べていることがわかる。

## 2、于鱗遺書絶交(于鱗 書を遺り交を絶つ)

李攀龍は文名が高まると、謝榛を排斥するために絶交書を送ったとするが、李攀龍が嘉靖三十三年(一五六〇)頃に送った絶交書(滄溟集)卷二五「戲爲絶謝茂秦書」は「戯れに」の但し書きつきで、その後嘉靖三十五年頃でも親交を表す資料が見える。さらに謝榛死

亡時（萬曆三年・一五七五）には、王世貞（『弇州四部稿』卷四二「聞謝茂秦客死魏郡、寄詩輓之」、徐中行（『天目先生集』卷五「哭于鱗墓甫三載、謝茂秦死于趙、而諸子生計甚微、乃出囊中裝遺之」、吳國倫（『甌鴈洞稿』卷二五「過鄴弔謝茂秦山人」）などが追悼文を寄せて、親交が續いていたことを示す。

つまり錢謙益の記載は、事實の一部を傳えてはいるが、總體的な眞實は傳えていないのである。

3、其稱詩之指要、實自茂秦發之。（其の詩の指要を稱するは、實は茂秦自り之を發す。）

ここからは、七子の文學理論は謝榛から奪ったものであるかのよ  
うに讀める。しかしこれは原資料、謝榛『詩家直說』卷三・四〇を  
巧みに改變したもので、そもそも『詩家直說』に表される謝榛の文  
學理論は、古人に倣う李攀龍・王世貞のものとは大きく異なってい  
る。例えば謝榛は、古文辭派が宗とする直接的な模倣に対して批判  
的（「作詩最忌蹈襲（作詩は最も蹈襲を忌む）」（卷三・一〇六）、  
「凡襲古人句、不能翻意新奇、造語簡妙、乃有愧古人矣（凡そ古人  
の句を襲いては、翻意新奇、造語簡妙なる能わず、乃ち古人に愧ず  
る有り）」（卷三・九）、「本朝有學子美者、則未免蹈襲（本朝、子美  
に學ぶ者有り、則ち未だ蹈襲を免がれず）」（卷三・二四）であり、  
規範とすべき作品も「初唐・盛唐諸家」（卷三・一二）また卷四・五  
七）と幅広い。

またそもそも謝榛は典據使用の少なさが指摘される作風で（明  
・王兆雲『皇明詞林人物考』（萬曆三十二年序刊本）卷九「謝茂秦」、

いわゆる古文辭派の文體とはその實作において異なるものがあるの  
である。

### 三、錢謙益の評價の影響——「七子」概念の變転

「小傳」を基礎資料とした『明史』によって、李攀龍・王世貞・  
謝榛・宗臣・梁有譽・徐中行・吳國倫の七人からなる「七子」概念  
は一般化するが、それ以前、實際には以下のように様々な「〇子」  
が存在した。

●李攀龍、余曰德、徐中行、吳國倫、宗臣、王世貞、張佳胤

（王世貞（一五二六〜一五九〇）「瑞昌王府三輔國將軍龍沙公暨  
元配張夫人合葬志銘」『弇州山人續稿』卷一一）

●李攀龍、徐中行、梁有譽、宗臣、王世貞〓「五子」

●李攀龍、徐中行、梁有譽、吳國倫、宗臣、王世貞〓「六子」

●李攀龍、余曰德、徐中行、梁有譽、吳國倫、宗臣、王世貞、張佳  
胤〓「七子」（八名）

（王世懋（一五三六〜一五八八）「賀天目徐大夫子與轉左方伯序」

『王奉常集』卷五）

●謝榛、李攀龍、徐中行、梁有譽、吳國倫、宗臣、王世貞〓「七子」  
（歐大任（一五一六〜九六）「梁比部傳」、焦竑『國朝獻徵錄』  
卷四七）

（陳繼儒（一五五八〜一六三九）『新刻陳眉公攷正國朝七子詩集

註解』序）

●謝榛、李先芳、吳維嶽、李攀龍

↓謝榛、李先芳、吳維嶽、李攀龍、王世貞

↓謝榛、吳維嶽、李攀龍、王世貞

↓謝榛、吳維嶽、李攀龍、梁有譽、宗臣、王世貞||「五子」(六名)

↓謝榛、吳維嶽、李攀龍、徐中行、梁有譽、吳國倫、宗臣、王世貞

||「七子」(八名)

(『明史』卷二八七・李攀龍傳、『明史稿』も略同)

以上からわかるように十六世紀中葉までは様々な「〇子」が存在したが、陳繼儒・錢謙益、それを受けて『明史』が「七子」を確定するに至り、所謂「七子」概念は定着したようである。<sup>(二三)</sup>

そもそも王世貞は『藝苑卮言』巻七に

吟詠時流布人間、或稱七子、或八子、吾曹實未嘗相標榜也。(吟詠時に人間に流布し、或いは七子と稱し、或いは八子とするも、吾曹實に未だ嘗て相い標榜せざるなり)

と述べ、王世貞は「賀天目徐大夫子與轉左方伯序」(『王奉常集』巻五)に、

而海内好事者家傳嘉靖間七子、豈非以建安之鄴下、正始之竹林、好稱譽其數耶。(而して海内の好事者嘉靖間の七子と家傳す、豈に建安の鄴下、正始の竹林を以て、好稱として其の數を擧ぐらざるや。)

と述べており、固定したかたちでの「〇子」に対して慎重な態度すらとっているのである。

以上見てきたように、錢謙益の記述には、事實の一部を切り取り、全體としては誤解に導くような例が間々見られる。これを以て基礎資料とするのは大變危険で、『小傳』と原資料の詳細な比較検

討が求められるのである。

第三部『列朝詩集小傳』李東陽、湯顯祖の評価をめぐる

て

(和泉ひとみ)

本報告では李東陽傳及び湯顯祖傳を題材にして検討する。

一、李東陽評價のポイント―明朝最盛期に育まれた文學

『小傳』は李東陽の功績を稱えて次のように言う。

國家休明之運、萃於成・弘、公以金鐘玉衡之質、振朱弦清廟之音。(國家休明の運「國家が最盛期を迎える運氣」、成・弘「成化、弘治年間」に萃あまり、公「李東陽」金鐘玉衡の質を以て「金の鐘のような高大な器量と北斗七星のように明晰な鑑識眼で」、朱弦清廟の音を振るわす「朱弦を練った大琴により熟した音色を奏で朝廷の文學を振興した」。)

錢謙益はここで、李東陽を明朝最盛期に政治及びアカデミズムの中樞にあって文藝を司った人物として位置づけ、高く評價している。李東陽は臺閣體の典雅を受け継ぎながらも、情感に富む洒脫な詩文を創作し文壇の風潮を變えたが、前七子の擡頭において政治的要因が相俟って、正徳年間以降、存在感が薄れ、明代の文壇において忘れられた存在となっていた。錢謙益は、それを盟友の程嘉燧とともに

再発見して文學史上に復活させたのである。『小傳』の外、『列朝詩集』の前身と考えられる北京大學圖書館稿本『歷朝詩集』<sup>(三四)</sup>の李東陽傳や、李東陽「夜過仲家淺閣」詩を踏まえた「七月廿三日舟過仲家淺牖、戲作長句、書李文正公詩卷後」詩<sup>(三五)</sup>、『初學集』卷八)にも同主旨の文を書いている。

錢謙益らが李東陽をとりわけ高く評價した理由は、彼らが單にその詩文の作風に感銘を受けたからというだけではなさそうだ。錢謙益「題懷麓堂詩鈔」(『初學集』卷八三)は、程嘉燧が選定した李東陽の詩集のために錢謙益が書いたもので、文中、李東陽の詩風と對照的なものとして、三つの「近代の詩病」を擧げる。即ち「宋元の窠臼に沿いて、排章儷句し、支綴蹈襲」「無理矢理寄せ集めて先達の作品を踏襲」するという「弱病」、「唐・『選(文選)』の餘瀋」「殘された墨汁」を剽<sup>かすめと</sup>り、生呑活剝し、叫號驟突「大聲で騒ぎ立てる」するという「狂病」、「郊」「孟郊」・島「賈島」の旁門を搜し、蠅聲蚓竅「蠅の音や穴から音を發するミミズの鳴き聲のような無病の呻吟」、晦昧結情「陰鬱で心亂れて解き放たれない」するという「鬼病」がそれである。このうち「狂病」は七子、「鬼病」は竟陵派を指す<sup>(三五)</sup>。また、やはり李東陽作品のために書いた「書李文正公手書東祀錄略卷後」(『初學集』卷八三)では、錢謙益は前後七子の「狂病」もさることながら、「鬼病」を患う竟陵派の「魃吟鬼嘯」、即ち魃魅の吟詠、幽靈の嘯きという作風のもたらす雲霧は、「空同」「李夢陽」より尤甚<sup>(三六)</sup>であり、そうした人々は「烏んぞ以て西涯」「李東陽」を知るに足る哉」と斷じている。こうした竟陵派の作風こそが國家の「氣運」を追隨させるのであり、國家隆盛の象徴であつた李東陽の作風とは對照的に、國家の「衰晩の懼れ」を惹く極めて危険なも

のだと考えたからである。(「徐司寇畫溪詩集序」、『初學集』卷三十)

こうした記述に據るなら、錢謙益が李東陽を再発見し、ことのほか高く評價する背景には、李東陽の詩文を作品本位で評價する以外に、亡國の危機を誘う竟陵派を排斥するための根據としたという側面があつたと考えられるのではないか。なお、錢謙益は李東陽の外、蘇州畫壇の領袖だつた沈周の詩文もとりわけ高く評價しており、李東陽と同様に、王朝最盛期の涵養が沈周の成就をもたらしたこと、唐末の陸龜蒙の境遇と比較するのは不適當であることなどを述べている。(錢謙益「石田詩鈔序」、『初學集』卷四十七)

## 二、湯顯祖を反七子の同志と見なした錢謙益

『小傳』湯顯祖傳では、湯顯祖が次のように言つて前後七子の作品を「贗文」と斷じたと記されている。

我朝文字、以宋學士爲宗、李夢陽至瑯琊、氣力強弱巨細不同、等贗文爾。(我が朝の文字「文學作品」、宋學士「濂」を以て宗と爲し、李夢陽より瑯琊「王世貞」に至るまで、氣力強弱巨細同じからず、贗文に等しき爾。)

この記述は湯顯祖「張夢澤に答う」(『玉茗堂尺牘』四)という書簡に基づくものである。文中、張夢澤即ち張師繹に文集の刊行を促されたものの、「世に行うに足らず」として湯顯祖は五つの理由を擧げてこれを拒絶している。『小傳』の引用は、その理由の二つ目に當たる部分で、若干文言が異なるものの同様の内容が見える。

しかし、湯顯祖の書簡では『小傳』引用部分の続きで、「弟何人能爲其眞。不眞不足行。」とし、自分も眞の文を書くことはできず贗の文しか書けないため、文集を刊行するには不十分だ、と言っており、湯顯祖がこの書簡において、單に前後七子を批判しただけではないことがわかる。

また、『小傳』には、湯顯祖が前後七子を批判し、それが王世貞に傳わったエピソードとして、次のように記す。

又簡括獻吉・于鱗・元美文賦、標其中用事出處及增減漢史唐詩字面。流傳白下、使元美知之。元美曰「湯生標塗吾文、異時亦當有標塗湯生者。」（又獻吉「李夢陽」・于鱗「李攀龍」・元美「王世貞」の文賦を簡括し「簡單に概括し」、其の中の用事、出處及び漢史、唐詩の字面を増減するを標す「指摘した」。白下「南京」に流傳し、元美をして之を知らしむ。元美曰く「湯生吾が文を標塗するも「指摘して書き改めたが」、異時亦當に湯生を標塗する者有るべし」と。）

これは王世貞の長子に宛てた書簡「答王澹生」（『玉茗堂尺牘』一）に見えるもので、『小傳』はこれを湯顯祖の反七子の論據としている。だが湯顯祖の書簡には続きがある。王世貞は湯顯祖の「標塗」を見た後、「微かに笑いて曰く『之に隨え。』』と言って『小傳』引用の發言をし、その對應を聞いた湯顯祖は「憮然として「茫然自失して」曰く『王公 達人にして、吾之を愧づ。』』と言ったとあるのである。一方、『小傳』は引用の直後に「王・李の興りて自り、百有餘歳、義仍「湯顯祖」霧霽充塞するの時「後七子による霧が充満する時」に當たり、其の間に穿穴し、力めて解駁を爲す「惡弊を

拂つて是正しようとした」（自王・李之興、百有餘歳、義仍當霧霽充塞之時、穿穴其間、力爲解駁。」と續けている。このように『小傳』の引用部分は確かに湯顯祖の文に見えるが、錢謙益は、湯顯祖の全文體の主旨を無視して『小傳』の文脈に嵌め込み、湯顯祖を反七子陣營の一員と見せかけているのである。

湯顯祖の前後七子に對する心情が錯綜するものであったことは、以下の文からも窺える。

錢謙益「湯義仍先生文集序」（『初學集』卷三）は、錢謙益が湯顯祖の文集に寄せた序文である。文中で湯顯祖は晩年、弟子の許重熙に「吾少きより文を爲るを學び、已に王・李を訾警する「瑕疵を指摘して排撃する」を知」り、六朝風の文を創ることに勢力を注いだ、やがて「亦王・李の朋徒」に過ぎないことに氣付いた、と言ったという。

また、湯顯祖が孫羽侯の文集に書いた「孫鵬初遂初堂集序」（『玉茗堂文』四）では、明朝最初期の大家の文は別格として、李夢陽・何景明が登場するに及んで、「世に所謂傳うる者」となったという。さらに、李夢陽・何景明の作品にはそれぞれ「氣剛なるも色晦き無きこと能わず」、「色明るきも氣柔無きこと能わず」という缺點もあるが、李・何の文には「其の貌」が備わっていると云える<sup>(七)</sup>と述べる。「貌」とは、『書經』洪範にいう五事の一つで、文藝作品においては、作品としての體裁が整い、文章作法に叶っている、ということになるだろう。孫羽侯の祖父・繼芳及び父・宜は、ともに何景明の教えを受けており、湯顯祖がそうした背景に配慮してこのように書いた可能性は否定できないが、この文が湯顯祖の文藝思想に全く反するものであったとも言い切れない。一方、この文では「王

元美「世貞」の七子、已に弱宋の路を開く」という孫羽侯の發言をも引用しており、湯顯祖は、確かに王世貞の非を認識していたとも考えられる。

こうした文献より総合的に考えれば、湯顯祖にとって王世貞は、ただ批判の対象であつただけではなく、「眞」の文を作る困難さを痛感させると同時に、自らの至らざる點を認識させる存在でもあつたと思われる。錢謙益とて、湯顯祖の前後七子に對する單純ではない見方を知っていたに相違ないが、『小傳』においてはその點を隠蔽して湯顯祖像を創りあげているのである。

#### 第四部『小傳』における李卓吾の位置づけ

(松村 昂)

私にとつて、明代文學の中で最も輝いていたと思われる場面を、錢謙益がどのように扱っているか、という視点から、『小傳』を見ることにする。

##### 一、明代文學で最も輝いた場面

李贄(一五二七〜一六〇二)の「小傳」は、閩集卷三「異人」の項に「卓吾先生李贄」として見える(採録詩三首)。

李卓吾の代表的な論説に「童心説」(『焚書』卷三・雜述)があるが、「小傳」には言及されない。

詩何必古選、文何必先秦。降而爲六朝、變而爲近體、又變而爲傳奇、變而爲院本、爲雜劇、爲「西廂曲」、爲『水滸傳』、爲今之舉子業、皆古今至文、不可得而時勢先後論也。故吾因是而有感于童心者之自文也。更說甚麼六經、更說甚麼『語』『孟』乎。(詩は何ぞ必ずしも古選『文選』中の古詩)ならん、文は何ぞ必ずしも先秦ならん。降りて六朝と爲り、變じて近體と爲り、又た變じて傳奇と爲り、變じて院本と爲り、雜劇と爲り、「西廂曲」と爲り、『水滸傳』と爲り、今の舉子業と爲り、皆な古今の至文にして、得て時勢の先後もて論ずる可からざる也。故に吾は是れに因りて童心なる者の自ずから文なるに感ずる有る也。更に甚麼の六經と説わん、更に甚麼の『語』『孟』と説わん乎。)

また正史から抜粹・編輯した『藏書』には、卷三七・詞学儒臣「司馬相如」に、【】に示したような批評を下すが、これも「小傳」には言及されない。

相如遂與俱之臨邛、盡賣車騎買酒舍【此相如眞文章】、而令文君當鑪、相如身自著犢鼻褌、與庸保雜作、滌器市中。卓王孫恥之【天下至今知有卓王孫者、此女也、當大喜、何恥爲】、爲杜門不出。

(相如遂に與に俱に臨邛に之き、盡く車騎を賣り酒舍を買ひ【此れ相如の眞の文章】、而して「卓」文君を令て鑪「酒がめを置く臺座」に當たらしめ、相如は身自ら犢鼻褌「小牛の鼻の形のふんどし」を著け、庸保と與に雜作し、器を市中に滌う。卓王孫之を恥じ【天下今に至るも卓王孫なる者有るを知るは、此の女

也、當に大いに喜ぶべくも、何ぞ恥と爲さん」、爲に門を杜して出でず。）

また、李卓吾の影響を強く受けた袁宏道（一五六八〜一六一〇、丁集卷十二〜十五）には「聽朱生說水滸傳（朱生の水滸傳を説くを聴く）」詩（『袁宏道集箋校』卷九『解脫集』之二。一五九七年三〇歳、呉縣知縣退職後、無錫での作）があるが、『列朝詩集』採録八七首には見えない。

少年工諧謔、頗溺滑稽傳。後來讀水滸、文字益奇變。六經非至文、馬遷失組練。一雨快西風、聽君酣舌戰。（少年より諧謔に工みにして、頗る『史記』の滑稽傳に溺る。後來水滸を讀み、文字益ます奇變なり。六經は至文に非ず、馬遷も組練を失わん「武具の組みひもを無くして、争う氣持ちを失うことだろう」。一雨西風快く、君が舌戰を酣たげなわにするを聴く。）

## 二、錢謙益の學問的立場と李卓吾批判

錢謙益の著作集『初學集』『有學集』の「學」はいずれも「古學」の謂いである。すなわち後漢の鄭玄・唐の孔穎達に代表される「漢學」、經書の章句の學、あるいは訓詁注釋の學であり、吉川幸次郎氏の「錢謙益と清朝『經學』」によれば「經典の逐字的、實證的な解釋を方法とする」ものである。詩文では嚴密な古典主義である。

錢謙益が「俗學」として攻撃するのは、廣くは「宋・明の學」で、その一は、朱熹に代表される「宋學（道學・理學）」、つまり吉川氏「道學は經典の思辯的主觀的な演繹を方法とする」もの。その二は、王守仁に代表される「陽明學（心學）」。吉川氏「宋儒の學風を更に自由に延長した明の儒學」である。また「俗學」の狭くは、前後「七子」の「古文辭」（僞古典主義）、竟陵派の「自是」（自らを是とする一人よがり、獨善的主觀主義）と學業の學（「經義」「帖括」）である。

錢謙益は「重修維揚書院記」（『初學集』卷四四）において、次のような李卓吾批判をおこなっている。

稽良知之弊者、曰泰州、之後、流而爲狂子、爲僂民。所謂狂子僂民者、顏山農・何心隱・李卓吾之流也。（「王陽明の」良知の弊に稽する「敬服する」者は、「王良（心齋）の」泰州と曰い、之の後、流れて狂子と爲り、僂民「罪人」と爲る。所謂る狂子・僂民なる者は、顏山農・何心隱・李卓吾の流也。）

「狂子・僂民」であるものの、その存在を無視するわけにもいかない理由があった。それは、弟子や友人にたいする影響であった。

## 三、李卓吾にたいする間接的評價

### 1、三袁の師であったこと

特に袁宏道（字は中郎）は「古文辭」反對の急先鋒であった。その

「小傳」に次のように記される。

中郎之論出、王・李之雲霧一掃、天下之文人才士始知疏淪心靈、搜剔慧性、以蕩滌摹擬塗澤之病。其功偉矣。（中郎の論出づるや、王「世貞」・李「攀龍」の雲霧は一掃され、天下の文人才士は始めて、心靈を疏淪し「洗ひ清め」、慧性を搜剔し「知性を探り出し」、以て摹擬塗澤「模倣と塗飾」の病いを蕩滌する「洗淨する」を知る。其の功は偉いなり矣。）

## 2、讀書家・著述家であつたこと

焦竑（『小傳』丁集卷十五・十六、一五四一〜一六二〇）は李卓吾の『續藏書』二七卷・萬曆三九年（一六一一）刊、にたいする序文で次のように述べる。

李宏甫『藏書』一編、余序而傳之久矣。而於國朝事未備、因取余家藏名公事跡緒正。（李宏甫の『藏書』一編、余序して之を傳うること久し矣。而して國朝の事に於ては未だ備わらず、因りて余の家藏する名公の事跡を取りて之を緒正す「序列する」。）

焦竑の『國朝獻徵録』二二〇卷は萬曆四四年（一六一六）に刊行されるが、それに先立つて、その材料を李卓吾に提供したものと思われる。

## 四、『小傳』における李卓吾の位置

士大夫としては認知できないものの、一定の評価はせざるをえない人物の處遇の場として、錢氏が探し當てたのが「閩集」での「異人」であつた。閩とは餘分の謂いであり、儒教を信奉する士大夫以外の人々。内譯は、「高僧」「名僧」「道士」「香奩（婦人）」と外國人。「異人」とは、右の分類以外の特異な人物を指す。

閩集卷三「高僧四人」の二番目の「紫柏大師可公」は、一番目の憨山大師清公の寺院私造による流謫と、民衆の礦税による被害に発憤して上京し、政争に巻きこまれて逮捕され、獄中で自殺した人物である。

このあとに「異人三人」が設けられ、一番目に「卓吾先生李贄」の「小傳」がある（他の二人はともに道教を極めた存在）。

獅子迸乳、香象絶流、直可與紫柏老人相上下。遺山『中州集』有異人之目、吾以爲卓吾可以當之。録其詩附於高僧之後、傳燈所載、旁出法嗣、卓吾或其儔與。（獅子乳を迸しらせ「獅子は如來のように數多の凡庸な者を蹴散らかし」、香象流れを絶つは「香氣のある青い象が菩薩のように徹底した叡智を體得するのは」、直ちに紫柏老人と相い上下す可し。遺山『中州集』に「異人」の目有り。吾以爲えらく、卓吾は以て之に當つ可し、と。其の詩を録して高僧の後に附し、「佛法の」傳燈に載せら所、旁らに法嗣「佛法の継承者」を出だすは、卓吾或いは其の儔なる與。）

丁集卷十二「湯遂昌顯祖」に附見の「李生至清」には、紫柏大師も

李卓吾も歿後の萬曆三十六年（一六〇八）、湯顯祖の門人李至清が僧装で上京しようとして錢謙益を訪れた時に、錢氏が贈った七律の末二句が引かれている。

游燕莫問中朝事、紫柏龍湖是汝師。（燕に遊ぶに中朝の事を問う莫かれ、紫柏・龍湖は是れ汝が師。）

錢氏は李卓吾の思想に全く同調できなかったとはいえ、明末の一面としてどこかに著録しておく必要を感じたのだろう。その點で一世代後の人々とは趣きを異にするといえよう。<sup>(二)</sup>

## 五、明末清初の反動

1、黄宗羲（一六一〇～一六九五）『明儒學案』（康熙十五年・一六七六成立、同三二年・一六九三自序）「泰州學案」にも他の學案にも顔山農・何心隱・李卓吾の三家を著録しない。

2、顧炎武（一六一三～一六八二）『日知錄』（三二卷本・一六九五刊）卷十八「李贄」 「儒学の聖賢をおとしめ、佛教に惑い、授業に男女を同席」とする。

3、歸莊（一六一三～一六七三、歸有光曾孫）『歸莊集』卷十八「誅邪鬼」（李卓吾と直接の關係はない） 「蘇州に金聖嘆なる者有り、嘗て『水滸傳』を批評し、之を名づけて第五才子書と曰うも、…余は之を見て『是れ倡亂（亂を倡うる）の書也』と曰う。未だ幾ばくならずして又た『西廂記』を批評して世に行われ、名

づけて第七才子書と曰うも、…余は之を見て『是れ誨淫（淫を誨うる）の書也』と曰う」。

4、王弘撰（一六二二～一六九九在）『山志』卷十八「誅邪鬼」 「予嘗謂李贄之學、本無可取、而倡異端以壞人心、肆淫行以兆國亂、蓋盛世之妖孽、士林之構杙也（予嘗て李贄の學を謂うに、本より取る可くもの無く、而も異端を倡えて以て人心を壞り、淫行を肆、まにして國亂を兆し、蓋し盛世の妖孽「亡國をまねく災い」、士林の構杙「惡獸」也、と）。

## 《注》

(一)「パネリストの一人から『列朝詩集』の「列朝」が示す意味の曖昧さについて問題提起があり、會場からも同様の意見があった。以下、この問題について補足する。この書は當初、『國朝詩集』という名で刊行が準備されていたが、當道の有識者からの忠告を受けた錢謙益は、鐫刻を終えた版木を含めて全て『列朝』に修正するように汲古閣主人毛晉に指示している（『錢牧齋尺牘』卷二「與毛子晉書」其三十九）。書名について錢謙益に忠告したのが誰であったかは未詳だが、時代はずでに清の天下であり、「國朝」が意味するところは「明朝」ではなくなっており、そのままでは當局から罪に問われかねなかった。今、汲古閣刻本を確認すると、各卷の冒頭一行の「列朝詩集」と巻末の「列朝詩集」の一行には後から入木修正したとおぼしき痕跡が残っている。ただし、（注二）に示すように、汲古閣刻本の序文は「列朝詩集序」ではなく「歷朝詩集序」に作るなど矛盾もある。なお、明末清初の史學家で、『國權』の編者でもある談遷（一五九四～一六五七）は、順治十

一年の七月、北京にいた吳偉業から『列朝詩集』を借りているが、『北遊録』紀郵上甲午七月の條には「因借其錢牧齋所選明詩」と記している。書名がどうであれ、當時からこの書は舊朝である明の詩選として認識されていた。

(二) 汲古閣本『列朝詩集』は「歷朝詩集序」に作り、『有學集』卷十四は「列朝詩集序」に作っている。

(三) 現在確認されている『列朝詩集』の稿本には、北京大學圖書館藏『歷朝詩集稿本』と中國國家圖書館の『明詩選』がある。孟飛『列朝詩集』稿本考略(『文獻季刊』二〇一二年第一期)、都軼倫『列朝詩集』編纂再探・以兩種稿本爲中心(『文學遺產』二〇一四年第三期)参照。

(四) 錢謙益が明末の政治状況について抱いていた悲憤については、拙論「晩明における南宋遺民詩の受容——錢謙益の評價と毛晉の刻書を中心に」、『橄欖』二十號、二〇一六年三月、頁三一七〜三三六を参照されたい。

(五) 錢謙益は「太祖實錄辯證二」(『初學集』卷一〇二)で、劉基は朱元璋への出仕を自ら進んで希望したのではなく、長い間逡巡していたこと、その理由は石抹氏から受けた恩情に背きがたかったからだと説明している。

(六) ただし、この逸話は『誠意伯劉公集』所收「行狀」ではなく、『皇明文衡』卷六二の「行狀」のみに見える。

(七) 「吳中野史」が書名なのか、それとも吳に傳わる野史という意味なのかは不明だが、吳喬『答萬季野詩問』は、「宮女圖」詩について、朱元璋が陳友諒を破り、その姬妾を別室に置いていたところ、李善長の子侄がこれを「窺覘」したのを諷諭したものとす。

(八) 清朱彝尊『靜志居詩話』卷三。

(九) 錢謙益の竟陵派批判については、拙論『列朝詩集小傳』にみる竟陵派批判の構造——引用資料を中心に——(『叙説』四二號、二〇一五年三

月、一〜二八頁)を参照されたい。

(一〇) パネルディスカッションの會場から『列朝詩集』にみられる文學思想は、錢謙益の中でいっところから醸成されていたものか」という問いかけがあった。これについていえば、錢謙益の明代の文集である『初學集』には「小傳」と同じような反七子や反竟陵の論調がすでに現れており、明滅亡後というよりも、かなり以前、晩明からのものと考えられる。ただし、錢にとつて目前の敵は、七子よりも竟陵派だった。

今日、竟陵派は公安派よりも低くみられがちであるが、実際には『唐詩歸』で一世を風靡した竟陵派の影響力は清初にも續いており、錢のいた吳の地方にも及んでいた。錢が吳聲の復権を唱えた背景には竟陵派の存在があったことを指摘しておきたい。

(一一) 小松謙「吳梅村研究(後篇)」(『中國文學報』四〇號、一九八九年、七六〜一二五頁)を参照。

(一二) 趙旭『謝榛的詩學與其時代』(中國社會科學出版社、二〇一三年、總二九六頁)二四〇〜二四一頁参照。

(一三) これに關する研究として、田口一郎「嘉靖七子再攷——謝榛を鍵として——」(汲古書院『村山古廣教授古稀記念中國論集』所收、二〇〇〇年、八四七〜八六一頁)がある。

(一四) 注(三)参照。

(一五) 注(九)参照。

(一六) 「湯顯祖傳」の湯顯祖文の引用については、野村鮎子「錢謙益による歸有光の發掘」(『歸有光文學の位相』第一部、第二章、汲古書院、二〇〇九年)に指摘がある。

(一七) 該當部分の原文は以下の通り。「國初大儒彝鼎之文、無所敢論。迨夫李獻吉・何仲默二公、軒然世所謂傳者也。大致李氣剛而色不能無晦、何色明而氣不能無柔。神明之際、未有能兼者。要其于文也、瑰如曲如、亦可謂有其貌矣。……華容孫公鵬初憂之、嘆曰『李・何於斯文、爲有

起袁振溺功。王元美七子、已開弱宋之路。……』

(二) 湯顯祖の王世貞評價について、兩者の文學的觀念の分斷を提示したのは錢謙益だとする研究もある。鄧新躍「湯顯祖與明代復古派文學思潮」(『三峽大學學報』第二十七卷四期、二〇〇五年) 参照。

(九) 『小傳』丁集卷九、一に袁宏道より一世代上の「崑崙山人王叔承」(一五三七～一六〇一。蘇州府下吳江縣の人) なる人物が著録されており、その採録詩に七言歌行「君不見、苕川席上、戲贈晉陵朱說書(君見ずや。苕川席上、戲れに晉陵の朱說書に贈る)」があり、その中に、「君不見、羅生水滸傳、史才別逞文輝爛。草莽雄心不自成、指點罨星灑江漢(君見ずや、羅生の水滸傳、史才は別に逞しく文は輝爛す。草莽の雄心自らは成らず、罨星を指點して江漢を灑う)」という句がある。晉陵は、無錫と同じく南直隸常州府下の縣である。『水滸傳』の説書を家業とする朱家の父子、あるいは叔姪であるかもしれない。

(三〇) 會場の一人から、「曰泰州、之後」の「泰州」のあとに讀點をいれることに疑義が出たが、『牧齋初學集』錢曾箋注・錢仲聯標校(一九八五年九月・上海古籍出版社)の標點にあえて従った。「泰州學派と、その後繼者」の意味が明瞭になるからである。

(三一) 會場では、錢謙益の李卓吾批判が明代か清代かという質疑がなされたが、「重修維揚書院記」が錢氏の明代での文集『初學集』にみえることで、答えは明らかである。